

スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究
平成二二年度プロジェクト『古儀式派から見たロシア・ソ連史』

報告書

代表 法政大学 法学部 下斗米伸夫

ロシア、およびソ連史における古儀式派問題を議論するという研究企画は、かねてよりスラブ研究センターの望月哲男と下斗米伸夫との間で構想され、それが今回採用となって以降、北大 OB の塚田力の三名を正式メンバーとして発足させた。爾来三回の研究会と数回の交流会を組織でき、内外の学会でも交流を深化させた。

研究史的には、ロシア史の文脈で取り上げられることの多い古儀式派を、二〇世紀になつての活動、ロシア革命と古儀式派、さらにはソ連体制下の古儀式派を含め研究するための予備的整理という位置づけであった。

第 1 回目は、4月24日に北大スラブ研究会において研究会を拡大して開き、主としてロシア史やロシア文学、宗教専門家が採り上げてきた問題がソビエト研究者をも取り込んで接近できるかという点で、下斗米が「ボンチ・ブルエビッチと古儀式派」と題して概括的な問題提起を行った。メンバー間では今後の研究スケジュールを確認、全体の議論では主としてフリー・トーキングの形で問題の射程と研究の可能性を議論した。

第 2 回目は、東京の法政大学で三浦清美氏（電気通信大）から「古儀式派の源流—決疑論の系譜」の報告を受け、研究会メンバー（塚田）の他、専門家、若干のジャーナリストも加えて、議論した。

第 3 回目は、12月2日北大スラブ研究センターにおいて塚田力氏が「オレゴンの礼拝堂派を訪問して」と題して夏のオレゴンでの古儀式派コミュニティー研究観察の成果を披露し、二一世紀の現在も米国を拠点に国際的な広がりを持つ古儀式派コミュニティーのあり方を主として戦後現代史の中での地位を含め議論した。

最後にこの企画は二〇一一年度で予算は形式的には終わるが、その後も研究を拡充する必要を確認した。

なお下斗米は、この関連で北大に所蔵されていた、レーニンの秘書で初代ソビエト政府官房長官であったボンチ・ブルエビッチの古儀式派研究『資料』などを発掘、また研究交流を通じて富山県西田美術館の古儀式派アイコンに触れるなど研究の幅をひろげた。そのいったんは小長谷有紀編の『文化としての社会主義—経験された近代化の歴史、そして現在』明石書店、近刊予定に掲載される「ボンチ・ブルエビッチとレーニン廟の思想」等に現れる予定である。